

2026 年 6 月 30 日

2025 年度 東京都立大学若手研究力強化派遣実施報告書

東京都立大学学長 殿

所 属 人文社会学部人間社会学科心理学教室
職 名 准教授

氏 名 登藤 直弥

1. 派遣先：The Hector Research Institute of Education Sciences and Psychology, University of Tübingen (国名：Germany)

2. 研究課題名（和文）※研究課題名は申請時のものと違わないように記載すること。

検定力に対して妥当性の推定値が与える影響3. 派遣期間：2025 年 9 月 30 日 ～ 2026 年 4 月 1 日

4. 研究の概要

能力や態度といった潜在的構成概念を研究の対象とする場合、質問紙などの尺度を用いてこれを測定することになる。測定の質を表す概念として信頼性と妥当性と呼ばれるものがあるが、測定値が構成概念を反映している程度を表す妥当性に関しては、これを表すためのモデルは提案されているものの、その値を推定する適当な方法は知られていない。そこで、信頼性を推定するために取得される平行測定値とその高次積率を用いることで妥当性を推定できることを示す。また、近年では、研究結果の真正性を高めるために検定力と呼ばれる値が一定以上になるように取得するデータの数を事前に決定することが求められるようになっているが、尺度を利用する研究ではこの検定力の計算時に尺度の妥当性を考慮する必要がある。本研究では、上述の推定法を用いて妥当性を推定し、この推定値を用いて検定力を求めた場合にどのようなバイアス等が生じるのかを検証し、それを補正するための方法についても検討する。

5. 所期の目的の遂行状況及び成果

【記載事項】

○研究・調査実施状況及びその成果（関係学会、学会誌等への発表等）

※学会発表に関する記載事項：学会名，発表題目名，口頭・ポスター等の形式，発表年月日等

※学会誌等への発表に関する記載事項：著者，発表論文名，学会誌名，発表年月巻号等

○海外に身を置くことで得られた経験・知見等

○研究・調査実施状況及びその成果

今回の The Hector Research Institute of Education Sciences and Psychology, University of Tübingen (Germany) 滞在においては、受入教員と共に、当初から予定していた研究課題を含めて 2 つの共同研究を行った。

まず、当初予定していた研究課題に関しては、申請書に記載した高次の積率を用いた妥当性の推定方法について申請者の考案した手法に関し受入教員との間で議論を行い、様々なアドバイスを受けることができた。その結果、尺度の妥当性の推定方法として、当初開発を予定していた高次積

率を用いた手法以外のものについても検討を始めることとなり、具体的には、第3の変数を用い2次の積率のみを用いて妥当性を推定する方法についての検討と開発も行うこととなった。今後は、引き続き受入教員との議論を重ねつつ、今回の滞在期間中に得られた手法案についての改善を引き続き行い、これらの手法がどのような性質を有しているのか、適応対象となる尺度得点との相互作用も考慮しながら、更なる検討を加えていきたい。また、妥当性の値を用いた検定力分析の手法についての開発も進んでおり、今後は、現在検討中の妥当性の推定量をこの検定力分析の手法にて使用した際にどのような影響が見られ得るのか、この影響についても考慮した具体的な検定力分析の手続きについて検討を行い、これらの成果を合わせて論文化、学会誌での発表を目指したい。

今回の滞在期間中に行なったもう1つの研究課題は、近年心理学の研究においてもよく行われるようになった縦断データ解析においてよく用いられるモデル群の先行研究において未検討であった性質について解析的に（数理的に）、またシミュレーションを通して数値的に検討する、というものであった。こちらの研究課題に関しても、受入教員との間で定期的に議論を行い、様々なアドバイスをいただいた結果、今回の滞在期間中に現地にて研究を終えることができた。現在は、細部について引き続き受入教員との間で議論を行いつつ、得られた研究成果に関して論文を執筆している段階であり、今後、早期に投稿準備を終えて学術雑誌への投稿を行いたい。

また、今回の滞在期間中には、受入機関で催された各種イベント（LEAD Retreat、受入教員の主催するゼミ（週1回））に参加させていただくことができ、受入機関の大学院生や研究員、そして教員が今現在どのような研究を行なっているのか、ゲストスピーカーとして招かれた他の機関の研究者が今現在どのような研究を行なっているのか、論文や学会発表を通してでは知ることのできない日本とは異なる現地での最先端の心理学研究の流行について学ぶことができた。

○海外に身を置くことで得られた経験・知見等

今回のドイツ滞在では、共同研究という形で申請者単独では取り組むことの無かったであろう課題に取り組むことができ、これにより研究者としての視野を広げることができた。また、関連領域である心理学の領域でどのような研究が今現在海外では行われているのか、最新の知見を得ることができ、今後の研究課題を考えるうえでも大変参考になった。そして、世界的に活躍している研究者たちがどのように研究活動を進めているのかを間近で観ることができたこと、共同研究という形でこれを実際に体験できたことは、自分自身の研究者としての在り方を考え直し、改めていくうえで本当に参考になる経験となった。何よりも、半年間実際にドイツに滞在し、日本以外の国における生活、文化、考え方などを実体験できたことは、人間としての視野を広げてくれると同時に、日本を相対化し客観的に見つめ直す視座を与えてくれたという点で、非常に貴重な体験であった。

6. 今後の活動予定

（学内発表会や公開講座、教員を対象とした公開シンポジウム、オープンキャンパス等）

「所期の目的の遂行状況及び成果」にも記載した通り、派遣先にて受入教員と共に行った共同研究に関しては、既に研究が終了し論文執筆を進めているものがある。これに関しては、今後早期に論文を完成させたいと、関連する学会誌に投稿する。受入教員との間で引き続き議論を行なっている研究課題に関しても、妥当性の推定方法について更なる検討を重ね、この手法を検定力分析にて利用する際の手続きについて検討したうえで、論文化し、関連する学会誌に投稿する。